



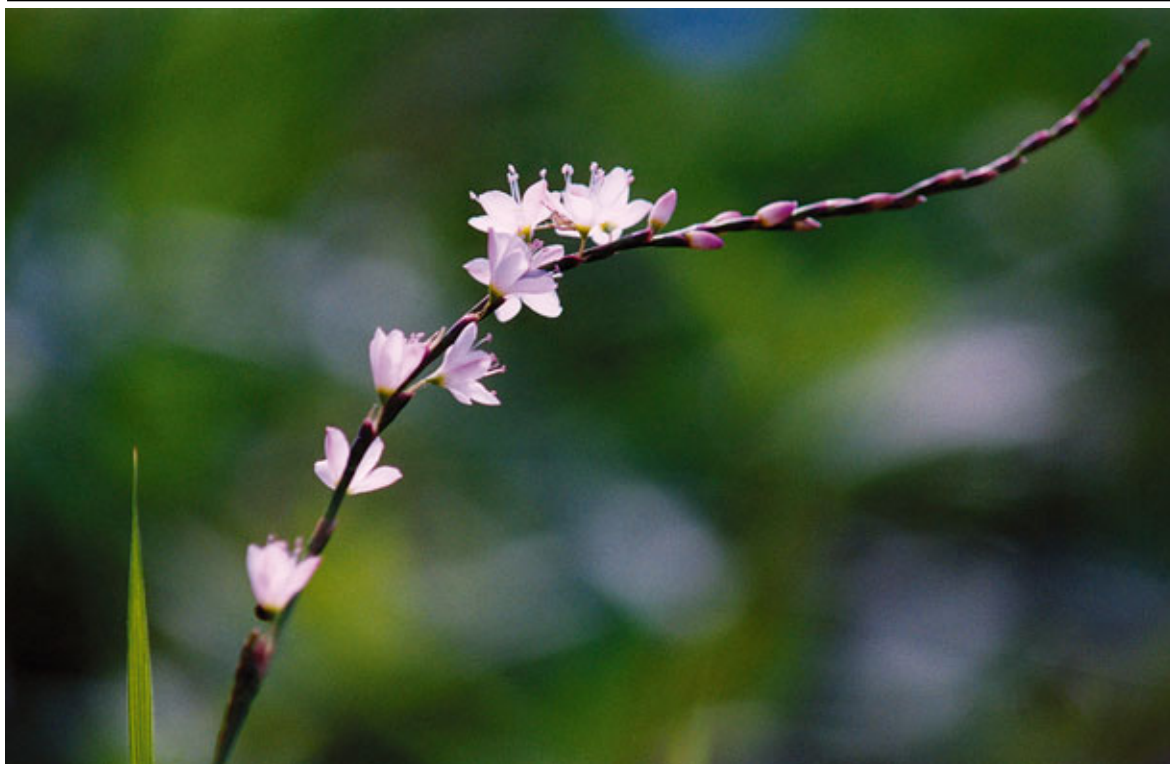
大倭出版局・大倭紫陽花邑

平成19年
9月号

毎月23日発行
通巻445号

(題字 矢追日聖)

★発行日 平成19年9月23日
★発行所 大倭出版局
〒631-0042 奈良市大倭町1の12
☎(0742)44-0015
★印刷 大倭印刷
★定価 1部 250円
年間購読料3,000円(送料共)
★振替口座 01050-6-67002
大倭出版局
URL <http://www.ohyamato.jp>



サクラタデ 井手 泉さん撮影

平成4(1992)年9月23日 月次祭法話より

宗教と先祖供養との区別

法主 矢追 日聖(満80歳)

悟りの日「彼岸」

今日はお墓参りに来ている人が沢山おられるらしいですね。今では「お彼岸さん」のことを「秋分の日」と言いますけど、元は仏教の行事なんです。漢字で「彼岸」と書くように、「こつち」と「向こう」の両方の岸の話になります。「こつちの岸(此岸)」というのは人間の現世の世界、煩惱の世界なんです。煩惱とは欲のためにお金で苦しんだり、あるいはみんな喜怒哀楽の心を持つてますから、腹立てたり喜んだりすることです。女と男がおるため悩む、親であれば子供の学校のことやええ着物の一つも着せたいというようなことで悩むとかね。だから、そんな世界で苦しめんと、一生懸命修行でもして何とか「向こう岸(彼岸)」に行きなさいと言っんです。その「向こう岸」というのは、菩提の岸なんです。いわゆる西方安楽国みたいな、苦しみも無く飯は食わしてくれし、楽しく遊んで一生送れるような世界のことだと仏教では教えてます。だから彼岸というのは墓参りをすることはなくて、本当は「悟る」ということなんです。それは、我々の心の状態が何も考えない空のようになって、空気がみえない人間になることやと般若心経では説いています。

まあ、理屈では解るけど、そんなものなれと言ったってなれっこないんですよ。けれども今日は丁度夜も昼も同じ長

さやから、「出来るだけそれに近寄るようにお互いに考えましょう」という日なんです。そこでまず「一番先に悟るべきこととして、自分のご先祖さんを思い浮かべることは非常に良いことなんです。自分達のご先祖さんのお陰で生まれて来たんですよ、生きておるんやから。」

世の中には、ほんとに苦しんで、生きたいという心が無くなって自殺するような人もありますが、大体において、死ぬのを喜ぶ人は少ないと思うんです。けど、何ぼ頑張ったかて一人残らずやがて死ぬんです。交通事故みたいな、予期せんとあつちの世界に行くような人も居るけれども、それは一つの「宿命」やと思うて諦めなあかん。

一旦生まれた以上は、死ぬことを怖がらず、なおかつ、自分を守らないといけないんです。自分が安全に暮らすためには、お互いに力を合わせていけるような、心の合う仲間を一人でも増やしていくということが一番必要だと思えます。

仏教のどのお経でも全てのは「縁」から始まると思っております。例えば、この大倭という一つの宗教団体とか地域社会があります。今あなた達を見て、一人一人何かの「縁」で来ているんです。

そして、大倭でいろんな人間関係が出来てくると、みんながお互いに協力し合うて楽しくこの世の中で暮らしていくことを勉強できるんです。この世の中を「苦の毒(＝苦しみ)の世界」やなくして、楽しんで暮らせる世界にするのは、神様も仏様も関係ないんです。あなた達みんなの心の持ち方によって創れるんです。

日本の宗教の維新

聖歌「黎明大倭」——うちのお経ですが——の、

一番最後に「昭和維新の比登柱ひとばしら(※参照)」という言葉がありますが、これは何も怖くないんですよ。「みんな仲良うせい」ということなんです。

昭和二十年八月十五日、日本が戦争に負けた時、私が大倭の宗教を始めたのが「昭和」なので、「昭和になって改める」ということなんです。

(「ひ」と「と」の柱ということ。「ひ」は霊界の人達のことなんです。「と」は肉体を持つている我々のことなんです。だから「ひ」の霊界人と「と」の現界人が仲良く、つないでいく柱になるという意味です。犠牲になるという意味じゃないですよ。平成7年7月

『おおやまと』299号より)

それは日本の宗教が誤つておるから改めるといふことなんです。例えば、あなた達、神社にお参りするんでも「病氣治して下さい」「金儲けして下さい」と、皆何かの願い事を持って行くんですよ。このように自分だけの欲望を神様にぶつけてお祈りするのが大体日本の宗教の一つの形になっておるんです。

現在でもいろんな宗教が流行つていますが、自分に何かのご利益をもらえんというような教えが無かつたら、恐らく日本人はあんまり宗教団体に入つて行かないと思うんです。「幸せになる」とか「子供の学問が良く出来るようになる」とか、丁度甘いところに蟻がたかつて行くようにして、そういう宗教にたかつて行く。

結局その全部が嘘なんです。こんなこと言うたら叱られますけど。

本當の宗教的な世界というのは、話し合いによりお互いの欠点を直していくこと、自分の精神状態をだんだん向上させていくこと、欲を無くすこと、人の痛みを解る思い遣りの心を持つてお互い協力し合うて前向きにいく、というようなことな

んです。

そのような生活をするために必要な物を求めるという場合は欲じゃありませんが、神さん拝んで自分が幸せになろうというのは、宗教の世界ではなくて「欲の世界」なんです。また、「あいつ腹立つ」とか「あいつ邪魔になる」というような邪険な心を持つて拝んだら、これは悪魔なんです。

ここにもお社が祭つてありますが、これはご本尊でも神さんでもありません。日本はこの神社へ行つても、天照大神とか素戔嗚尊すさのおのみこととか祭つてある神さんがありますけれども、それは「人格神」と言つて、本當は宗教の対象じゃないんです。解り易く言うと、我々の先祖さんと一緒に、私達から見たらちよつと先に生まれて死なはつた先輩であり功労者であり立派な人というだけなんです。霊の世界には、時間というものがないんです。

だから千年前であろうと死んで霊の世界に入った人も、今現在生きている我々も、同じ時点に一緒に居るんです。

今ここへも、あなた達のご先祖さんが大勢来てはります。あなた達のこの肉体の中の細胞とか流れておる血液は、そのご先祖さんから通うて来たものなんです。前に祭壇があるからね、皆向こうに居ると思つているかも知らんけど、全部こっちと一緒に居る。あなた達誰でもここに一人座つておつたら、その何万何億の先祖さんが皆つながつて来ておるんです。祭壇は、そのご先祖さんと、あなた達の方に向けてお供えしてあります。

日本では何か願い事あつたら神社に行く。例えば大東亜戦争でもそうです。「神さんの力で勝てる」「神風が起る」とか、全国挙げて戦勝祈願をしたはずですよ。ところが、そんな神さん聞いてくれはらへんかつてんわな、負けたんやから。何ぼ祈願したかて人格神はね、そんなことに協

力してくれるものと違うんですよ。これは生きて
いる人間同士がお互いに仲良くするという問題な
んです。私が言う日本の宗教の昭和維新、その比
登柱になるといってはそこなんですよ。

信仰の対象は宇宙の原理

神さんとして信仰する対象、宗教の世界におけ
る本尊のご本尊とは、地球が出来て土の上に木や
草が繁茂したりと、万物一切を生み成し育ててお
る宇宙の力なんです。現在の我々みんな、そのご
本尊によって生かされているんです。あんな達の
心臓を動かしているのは自分の意思ではない。空
気でも誰かが作ったものではないんですけど、我
々それを吸って生かされている。そしてこの腹の
中にいるんな機能を捨ててもらって、飯を食べば
栄養になり、余計な物は小便や糞になって出てい
って肉体を維持さしてくれておる。このご本尊を、
皆さん自分の体を持って歩いておるんです。

そのご本尊である天地自然の恵みに対して、ど
こでも日々感謝の心でお礼を言うこと。道を歩
きながらでも、そこには神さん居てはんねんから。
ご飯食べるにも糞をするにも「ありがたいな」と
感謝する。

また、山林を無茶苦茶に切りまくって、例えば
ゴルフ場にするとかいうことは神様に逆らってい
る行為なんです。まあ今の言葉で「自然主義」と
いうかね、自然がご本尊なんだから、その空気を
濁さないようにするとか、もつと皆が住み易いよ
うにしていくなことが信仰だと思っんです。

この上は天で、その下に空気や土があり、その
また下は地です。天と地の間の土の上に、草も木
も生えているんですね。だから陽と陰が一緒にな
っている所で、全てが生々化育されておるんです。

これは「神ながらの道」「自然の法則」「宇宙の原
則」、科学的に言えば「相対的原理」なんです。

世の中全部プラスがあつたらマイナスがあるん
ですね。昼があつたら夜があり、木でも犬でも猫
でも人間でも、やっぱり皆これ陽と陰、雄と雌、
男性 女性があるんです。肉体の仕組みでも、例
えば血液は大動脈に対して静脈というふうにな
って動いている。ここのしめ縄でも本当は二つにな
らんといかんけど、それやつたらかつこ悪いから
三つで組んであるけれどもね。

日本の神の道はこの宇宙の仕組みがご本尊です
から、全部陰と陽が一つになった姿を形どつてい
ます。この祭壇の真ん中に立っているご幣、昔は
実物の鉾だったんですが、あれは男のシンボル、
男根ですよ。下の台は女の道具、陰部なんです。
陽が上にあつて陰が下にあるんですね。それが一
つになつて調和して物事も増えていく。男の人は
前にぶら下げてるし、女の人は前が割れとるしね、
皆ご本尊を提げて歩いておるんです。

お宮さんの仕組みでも女の道具を形どつたもの
で、入り口の鳥居は陰部なんです、はつきり言う
たら、これは霊界の人が教えてくれてん。鳥居か
らずーと参道(産道)があつて大抵木が生やし
てあるわな。その一番向こうのご本尊が子宮や。
そこで子供が宿るから神さんの御霊はそこにある
わけや。

日本の宗教は「エロ宗教や」とよくキリスト教
徒に言われるけどね、それはその通りなんです。
けれどもその人も、お父ちゃんがお母ちゃんの内
の上に乗ることによつて生まれて来たんやから、
自分の親のことを侮辱していることになるん
です。言い方によれば猥談みたいになるかも知らん
けど、これが本当の原理なんですよ。

肉体を持たない霊界人と、肉体を持つている我

々現界人も、お互いに交流し向上することによつ
て救われるという、陰と陽の因果関係になつてい
ます。夫婦でも同じことなんです。また浮気する
者も陰と陽のそんなところへ引つ掛かっているんや
しね。だから夫婦が両方仲良くしなかつたら上手
くないんですよ。そこは神さんが宿る所やか
ら、お互い大事にせないかんわね。

霊界人は仲良くする対象

今までは普通の人格神を神さんだと思つて皆信
仰しておつたけれども、それは神さんとして信仰
する対象ではなく、仲良くする対象なんです。こ
ういう信仰の原理を皆さんにはつきり認識して貰
うのが私のお役目なんで、いつも同じことばつ
かり言うておるわけです。だからあんな達、耳がタ
コになるかも知らんけども、まず身近なところ
はご先祖さんと仲良くしてほしい。

ただもう「ナンマイダブツ」とか拝めばいいと
いうんやなしに、一つの形を持って仲良くするん
です。霊界の人は元々人間として生きていたんや
から、「食いたい」とか「飲みたい」とかの心が
あるんですよ。だからやつぱりあんな達が日々食
べてるご飯やお水、お茶も供え、「ご先祖さんど
うぞ」と言うてお祭りしていく。物体を食べるん
じゃないから、一粒のご飯でも何億の霊界人は満
足しはるんです。但し毎日欠かさずきつちり朝と
晩は礼拝すること。出て行くときは「ご先祖さん
行ってきます」、帰つて来たら「ただいま」、土産
でも買つて来たらそれをお供えするとか。生きて
いる人のようにして、ご先祖さんが家に居るとい
う気持ちでお給仕することが一番必要なんです。
ご先祖さんと自分らは同じ血が繋がつておる一
番身近な関係やから、そうすれば家内がうまくい

くんです。例えば皆さんが車に乗ってはるとして、危ないときには「先祖さんが助けてくれます。ともに正面からぶつかって死ぬような場合にでも、怪我だけで済むとか。それはもう拝まなくても必ず助けてくれます。仲良うさえていたら。生きている者同士でもそうでしょう、例えば道で引っくり返っているとき、知り合いが居たら「あ、お手伝いして病院へ連れて行こか」と誰でもなりますわね。それと一緒になんです。

毎月、大倭会文化行事は大抵、神社へ行きますけれど、神さんを拝みに行くとか願掛けに行くとか、そんなんじゃない、遊びに行くんですよ。

日本では宗教の世界と、霊界のご先祖さん達と人間とが交流していく世界とを、一つにしているから具合悪いんです。それをちゃんと分けておかないといけない。だからまあ、あんた達も大倭へ来た以上はね、先ずは自分自身の心の切り替えをしてほしい。

心霊治療は神様と無関係

あんた達ももう私にあんまり言わさようにしてほしいねんけどな(笑)、やつぱりね、大倭へ行ってご利益貰おうとか、病氣治して貰おうと思ってる人が沢山おるんです。それはあんまり良くないねんで。(笑)

大倭に来て病氣の治っている人は実際に居りますわ。けど、これはお医者さんと同じで私が個人的に心霊治療しているんや。神さんが治してはらへんねん。私が死んだら、また誰か代わりの人が居るかどうかわらんけど、だから、ここで病氣が治ったら「大倭の宗教は有り難い」とか「結構な神さんや」とか思ってもらたら困るし一切口にしてほしくない。それは、うちの神さん冒瀆してる

ことになるんやから。「矢追日聖という人に治してもらった」ならかまへん。それかて一時良うなってるだけやわなあ、やがて死ぬんやもの。(笑) 酒やタバコが過ぎる、無理をして睡眠不足になる、下らんことに神経使つてというような理由で肉体を患っている場合には医療によって治してもらえばいいんや。私のところに来る人は、割合に霊障害、霊の障りさかりによって病氣になっている人が多いんです。

昔どこかで人が死んだとすると、霊魂というのは肉体を持たない人間やから、その人の霊魂はそのままそこに在るわけ。肉体を持つている人間はそれが判らんもんやから、そこに家を建てて住まいますと、その霊魂は先住者やから「お前、俺のとこへ黙つて何しに来やがってん」と腹を立てるんやな。霊魂でも皆、生きている我々と一緒に腹立てますねんで。それで、ちよつと病氣にさす。

ところが、「仲良うして救つてほしい」というような心で、自分の存在を知らずために病氣にさす場合がある。そうすると、人間関係とか何かの因縁でルートを作つて、「どの医者に掛かつてもあかん」と、やがては大倭に出て来るんです。そういうのはかなり高級な霊魂が多いんですよ。

霊魂は物体と違つて形は無いけど、力があるんです。スイッチを入れたらすぐにテレビの映像がポツと出るやろ、霊魂は丁度その電波みたいなものや。人の肉体は宇宙の力、即ち神さんによつて生かされておるけど、霊魂も肉体を運営する力を持つております。元々体の中で十なら十の力で運営しているところへ、五の霊魂の力が入つて来たら十五になる。すると故障が起こつて神経系統がいかれるから、大抵、精神病院に入るんですわ。回り回つてここへ来て、私が診たらすぐに判ります。そうすると、その霊魂にもあんた達のと同

じ、目には見えない心があつて、それに対して私の色々と説教します。相手の霊魂が納得したら、その霊障害の人の心の五の力がスツと外れる。そうすれば元の肉体の状態になる。それから後は医療で治つていくと思うんです。

そのようなことを判るものが、生まれ付き私のこの愚鈍な頭に入つとんねん。何も水被つたりお経上げて行ぎやうをしたこともない。第一私あんなこと嫌いやし、今でもこんな宗教みたいなことするの嫌いやねん。ケツから目に見えん縄で誰かに叩かれてるから仕方なくしとるけど。(笑)

それでも、一人でも喜べる人が出来てくれたら私は嬉しい。だから私のところへどんな相談に來られてもかまわないんです。私は気楽な人間やから、どんな話しを持つて來られたかて割に腹立てへんし怒りもしません。

ややこしい下らん欲で、神さん助けて下さいと拝みに来るんやつたら、うちの神さんは逆にバチ当てはるんやから。私も一々そんなこと神さんに言わへんけど(笑)。そんなこと、神さんに言うたらこつちが逝つてしまふ。「お前、そういうことしたら、すぐお迎えに行くぞ」と言われているんです。やつぱり私でも、この世における間はたとえ一日でも長生きしたいしね。(笑)

今日は五目飯みたいに色々なこと言うてますけれども、その中で何か自分に旨いものがあつたら、それだけをあんた達は栄養にしてもたらよろしい。それでまた飽かんと遊びに来なさいや。何ぼ来てもらたかて、うちの神さんは、ご利益無いけど私が相手になりますからね。(笑)

まあ今日は喉も渴れてきたからやめます。宗教とご先祖さんの回向供養との区別をはつきりとしてほしいなと思えます。じゃあ皆さん元氣でね。

特集

私と戦争(中)

先着順

小学生当時

神戸市北区 西城好枝

(87歳・元大倭安宿苑看護婦)

斑鳩小学校は、奈良県の法隆寺と竜田の間にある。校長先生は栗山倉次郎と言って、長年、平群村より自転車を通っておられた。当時の生徒には、学校の教員や警察官は最高にえらい人で、校長となれば神様のように思っていた。登校時、校長の自転車があると、緊張は極に達し、「おはようございます」の声はひとしおピリツとしていたものである。教育勅語は、神の声であり、きびしく実行したのである。

運動場は、男子と女子は別で、一本の松を境に絶対に入ってはいけない。その女の運動場に、朝会の前に大人がたくさん入っている。千人針と言って、タオル一枚ほどの幅の布に、千人が赤い糸を縫い付ける。それを戦争に行く軍人が身に付けていると、敵の弾よけになるといのである。縫うのは女性のみに限られている。村中を歩いて頼んでも千人は大変である。運動場の女の子に頼もうという、親達の切ない思いが込められている。

その中に、今思えば脳卒中で、歩行も自由にならず杖を片手に、「お願いします」と頭を下げている老人がいた。女手もなく、この老人を残して息子が入隊するのであろう。突然、女の子が「爺ちゃん、我等は年女やで。教室へ行って頼んだげ

る」と言って、布と糸針を受け取り走った。年女は、一人で十針縫うことが出来るのである。老人は泣き出して「おおきに、ありがとございませう。お世話になります」と首に巻いたタオルで眼を拭いたが、どうして泣くのかよく分からないくらい私はまだ小さかった。大人が子供に、そんな言葉は言わない時代だった。

先生も出て来て「私も千人針のお陰で帰ってきました。大丈夫ですよ、きつと帰ってきますよ」と老人をいたわった。笠岡先生だった。若い先生は殆ど入隊していたが、戻っておられたのか？

海外に居て、本土の空襲は知らないのだが、ものごとろついで以来、長い戦争であった。この小学校の片隅の出来事を、私はずっと忘れることがない。老人の息子は無事に帰ってきただろうか。

廃墟のなかで

神奈川県川崎市 針生夏木

(井手泉さんの2歳上のお姉さん、故人)

——長いお付き合いのはずの井手さんから、原爆投下前後の長崎の体験を、初めて聞きました。その衝撃で「私と戦争」の特集が決まったのですが、井手さんは、自分はどうしても言葉にできないからと、当時の共通する体験や思いが書かれているというお姉さんの遺稿の一部を届けてくれました。(編集部)

1945年8月9日。運命は私を見のがした。私が学徒動員で働いていた三菱の兵器工場はまさに爆心地にあつたから、出勤していれば即死だったろう。めつたにそれな休職申請が認められて、長崎から汽車で2時間ほど離れた家族の疎開地に、前夜から帰っていたそのほんの小さな偶然が、私の命を左右したのだ。だから私は、多くの親しかった友人、知人の一瞬の死を思うとき、原爆の

ことを語る資格はない、と長い間沈黙してきた。今でも積極的に語る気にはなれない。

ただ、毎日必死で線路の回復を待ち続け、敗戦の翌日(原爆から1週間め)、やっと長崎近郊まで汽車が通じて、そこから歩いて瓦礫の町にたどりついたとき……あれほど美しかった山々、毎日、電車の窓から「きょうも生きてたよ」と呼びかける相手だった山々のてっぺんまで、一木一草もなく赤く焼け焦げ、ぼうぼう千里、うす紫のもやがたちこめる市街区の廃墟を見渡したとき……私の中なで何かがはじけ散った。

ぎらぎらと照りつける太陽。毎日、暑かった。汗びつしよりになりながら、母親はじめ一家5人を瞬時に失い、トンネル工場で仕事をしていて自分だけが助かった友人に再会して、「生きてた!」と互いにおどろきあい、いっしょに瓦礫の町を歩きまわった。家があつたと思われるところを探し歩き、棒切れや素手で何かないかと掘り返し、壊れた眼鏡のツルや、割れた茶碗や、溶けたビー玉のかけらなどを見つげるたびに、はつと身を引き「たくさんの人の命が……だれのために……何のために……」と、こみあげる激しい怒りに歯をくいしばってポロポロ泣いた。

放射能だらけの爆心地を何日も歩き回ったために、私はちよつとした傷でも何日も血がとまらず、そこが化膿して全身おできだらけになった。当時は「放射能」などという言葉はない。無数の傷あとを見ながら「一時期、放射能で白血球が減少し抵抗力がなくなっていたんだなあ」とある医者が告げたのは、ずつとずつとあとのこと。

若い娘には辛い、不安につつまれた数年間だったが、何の傷も見えず、互いに喜びあつた友人が何年かあとで髪の毛が抜けはじめ、出血がとまらず突然亡くなった、と聞いたときのショックは大

きかった。結婚して生まれた長女に先天的な肺疾患があると聞かされたときも、もしや……と、口にはだせぬ不安におびえた。それでも私は、せつかく運命にもらった命を大切にしなければ、と思いつながり生きてきた。被爆手帳をもつ一人として、私の長い恐怖の年月は、理屈ではない反核への本能的な強さを培ったと思う。

冷戦の崩壊で、世界世論はようやく禁止条約を決めるところまでもってきた。だが、なぜ禁止しなければいけないか、という運動は、まだこれらが正念場だろう。なぜなら日本のなかにさえ、抑止力としての原爆の効用を暗に確信している人たちは、けつして少なくないから。アメリカの傘のなかにいる現実としつかり向き合い、それをくつがえす論理を磨いていくのは、長い困難な闘いになるはずだ。

ただ、これだけは言っておきたい。日本は世界の非難をしつかり受けとめ、原爆を被害面だけでとらえず、犯した加害面の追及もきびしく続けると同時に、ヒロシマ ナガサキを忘れるな！と叫び続けることにも、大きな責任がある、と。

それは、核の抑止力は国家威信の競争には役立つとも、人類の、いや地球全体の将来のためにはけつして役立たない、という自明のことを、世界のすみずみの人にまで、具体的に知ってもらうための闘いではあるまいか。被害の実情は、私たち日本人にしか語れないのだから。

私と戦争

奈良県生駒市 藤田 啓子

私は昭和20年8月27日に生まれました。ですから戦争の体験も記憶もありませんが、生まれた所が朝鮮慶尚南道馬山村で、母の胎内で戦争、そし

て終戦を感じていたことになりました。

小学生の頃、祖母から、私には年子の兄がいて兄と私は朝鮮（韓国）で生まれて終戦になって、やせて青白い顔をして帰って来たとは何度も聞かされました。兄は、日本（長野県）に帰って10ヶ月位、2歳で亡くなりました。

このような出来事を疑問も持たず受けとめていたのですが、18歳の頃に戸籍抄本を見て、ここに書かれている馬山とはどこなんだろうと初めて胸の奥にひつかりました。でも、飲めないお酒をちよつとだけ飲んだ時にいつも「アリラン、アリラン」と唄っていた父、何も話さない父や母に対して聞く勇氣はありませんでした。これは両親の晩年まで続きましたが、結婚して久しぶりに実家に帰った時、思い切つて父と母に、さりげなく聞いてみました。母から「日本が負けたと分かつても、朝鮮の人にはとても親切にしてみましたよ」と、これもさりげない返事がかえってきました。

父はしばらく馬山に残り、母は1歳の兄と生まれたばかりの私を連れて、父の下にいた兵隊さんに付き添われて日本に帰つたようでした。

父は戦後、書道と俳句で生涯を終えました。いつも赤い首をして左の耳の下に大きな傷があり、時々つらそうに耳垂れを拭いていました。肉体的にきつい仕事は無理で、それが戦争の時の傷のせいだとは私達姉弟は知らされず大きくなりました。なので、弟は一時期とても反抗的でしたが、父は一言も弁解しませんでした。そして平成13年に86歳で亡くなりました。

父が亡くなつた後、母に色々聞いておきたいと思つたのですが、「状況が大変になつてきたので北から南へ移動した。ソ連兵に見つかつたら大変だから、顔に炭をぬつていた」と話すだけで、兄を連れ大きなお腹を抱えて、馬山まで来て私が生

まれた時の事とか、それ以上聞けませんでしたが。ともかく大変だつたらうとは想像できましたが。

平成14年5月、私はあじさい邑の数人と韓国南部に旅行する機会を得ました。皆が計画を変更してくれて、思いもよらず馬山に行けたのです！

朝から道路が川のような大雨の中、タクシーで慶州から馬山駅まで1時間ほど、そこは三方を低い山に囲まれた落ち着いた街でした。雨は上がつていて、駅前道路の路地をのぞいたり、あちこちうろろと歩きまわりました。舞鶴という地名もありました。ここに、ある時期、父と母と兄と私が居たのだと思うと胸が苦しくなり涙が止まりませんでした。母は「家の窓から山が見えた」と言っていたし、父はその家から毎日出掛けていたそうです。今、馬山には海軍基地があるらしく制服を来た人達も歩いていたので、父もその辺りに行つていたのでは——と想像するばかりですが。

帰つてから、馬山の写真を母に見せたのですが、母の記憶の景色とは大分変わつていたらしく、でも山だけがなつかしそうです。写真を見ている母の姿から、敗戦国の人間が、そつと隠れるように暮らしていた姿が想像できました。その母も平成16年10月に89歳で亡くなりました。

両親の物を整理した時、会寧郵便局と書いてある、茶色に変色した封筒が出てきました。私達の足跡は、北のこの辺りから出発したようです。

父や母に十分聞けなかつたという後悔と、反面、これで良かったのかなあという思いもあります。しかし、未だに殆ど手付かずの父の部屋をゆっくり整理して、私の空白の時間と場所が少しでもつながつたらという気持が完全に消えることはありません。そしてもう一度馬山に行き、父や母や兄と一緒にあの街の体温を感じて来たい。62年過ぎても、そんな風に、私の戦後は続いています。

寸 莎

第76回

梅 垣 修 三 さん



聴く診る触れる

「私は六人姉妹の末っ子やから甘えたでね、苦労して戦後目覚めた同世代（七十五歳）の小田実や開高健藤本義一みたいに鋭くなくて、ぼんやりもんなんですわ」そう話されるのは、大倭病院の整形外科医である梅垣修三さん。その雰囲気からは、穏やかな小児科医を連想させる。

学生の頃、解剖学の先生が「患者は医者が悪しとして百パーセント良しと思う治療をしてあげても、必ず喜ぶとは限らへんのやで」と言われた意味が分からなかったが「今、振り返ってみて確かにそうやと思う」。「あんまりええ例えではありませんが、医者、芸者という話をする事があるんです。どの世界でも人と接してサービスを提供する側と受ける側との感覚の違いは、今も昔も変わらないと思う。なんぼ専門家やえら

いんやと言うても、性格的に合わないとか気分が良くなかったと感じると治療に來なくなるでしょ」

この両者のギャップを埋める事がトラブルの防止にもなる。それには「信頼される人になる」事だと言う。「患者さんが診察室に入ってから来た時に、何を望んでいるのかを見抜かなあかん。話を聴いて、診て、触れて診断する。レントゲンを撮るんやったらそれからやね」。

梅垣さんは、昭和七年、大阪天満宮の近くで父親清次郎さん、母親久さんの間に生まれた。明治生まれの清次郎さんは「子供には教育を受けさせてやらなあかん」と、個人商店との大阪三品（綿糸 綿布 綿花）取引所で一生懸命働き育ててくれた。「父は私が夜遅くまで勉強していると寝んと付き合ってくれました」

小学六年の二学期を終えた頃、寝屋川に越していた梅垣さんは、三月

二十日大阪空襲で市内が焼けているのを冷めた気持ちで見ていた。「大変な世の中やった、もう二度と戦争はいりません」。当時は「国のためなら二十歳で命はないものと思てましたし、それを怖いとも思いませんでした。教育というのは怖いんです」。進路は、長兄が医師をしていた事もあり「新制高校の頃に医者になろうと自分で決めたんです」。

奈良教育大学理科丙類（教養学部二年間）を終了後、奈良県立医科大学に入学。「ただ医の道を究める事を目標にしてみました」

奈良医大卒業後、一年間のインターンを終え、昭和三十四年奈良医大整形外科に入局。一年後、布施市民病院で二年間勤めた。その頃、同級生で小児科医をしていた嘉子さんと結婚。男子二児の子宝に恵まれた。再び大学に帰り、麻酔のトップレベルにあった恩地先生に師事し整形外科と麻酔の研究に励む。医者のお手本として基本となる教えを受けた。「先天性股関節脱臼」で医学博士を修得。一生の仕事と決める。

昭和四十年、東大寺整肢園で小児整形外科医として勤務。子供が好きな梅垣さんは、若さと意欲にあふれた七年間一杯働いた。

当時非常に多かった先天性股関節脱臼の治療のために、股関節に巻い

たギブスをギブスカッターで切る時など、その大きな音で親は驚き、子は泣くわで、とにかく診察室は喧しかった。「親子共々安心させるのに大変でした。安倍前総理じゃないけど、ky（空気を読めない）にならんように、皆さんの苦勞を身にしみて感じてあげんとね」

浅間山荘事件のあった昭和四十七年頃の世の中はまだまだ安定しておらず「奈良県の南部は山間部で医者が足りなくてね、患者さんが途中一泊して大学（橿原）や東大寺整肢園に來られるケースもありましたし、治療を続ける苦勞や費用を聞くと、親御さんは泣く泣く黙って帰る事もありました」。

東大阪府立総合病院で副院長をした後、榛原町立病院で福祉事業の会長がある時は、いつも日聖さんがいらつしやっていたのを覚えています。停年後、平成九年九月、松本元嗣院長とのご縁で今年二十周年を迎えた大倭病院に勤務して九十年になる。「皆仲良くいこうというのが私の主義なんです。中を取るといのは苦しい時もあります、自然に、なるようにしかありません」

安心してインタビューできたのも実は梅垣さんの問診の技術であったのかも知れない。（聞き手 李 章根）

AWTC日誌

8月12日 午前8時より大倭墓地の清掃、9時より大倭紫陽花呂境内の清掃が行われ、炎天下の中、無事終了。

8月15日 大倭教立教開宣記念日で、午後2時より大倭神宮にて祭典が行われました。

大本宮奥津斎庭の倒れた枯れ松を解体するためのお清めが教長家麻呂さんによって行われました。

8月20日 9月末予定 大倭町の東側の一画(交流の家を含む)の住宅の下水道工事。

8月21日 法主さんの弟矢追隆義さん(享年86歳)が帰幽。奇しくも1年前の同じ日に奥さんの綾子さんが帰幽されています。

す。本紙では「隆家の頃の法主」という、良い記録を残して頂きました。

8月23日 大倭大本宮月次祭。大倭墓地の木が大きくなり墓石が倒れてきたため、切らせてもらう前に、挨拶とお清め。

8月25日 大倭会主催「弥栄おどり」。朝9時から準備、夕方から模擬店、「音丸会」一行の



音頭で7時半から10時半頃まで踊りました。踊り手などの参加者も多く盛況で、行者のイタリア人も見物に来ていました。

8月26日 朝8時から昼頃まで「弥栄おどり」の後片付け。皆さん連日お疲れさん!

8月27日 東光大祭及び祖霊祭。1時半から東方の碑前でお祭り、2時から拝殿において東光大祭、奥津斎庭で祖霊祭。夕方から大倭会館で直会。満月の下、表も賑やかでした。

9月1日 夜、大倭会館で「弥栄おどり」の慰労会。

9月6日 大倭神宮月次祭。夜、大倭会館で邑倭の会。

9月9日 祝会。

昇ちゃんとは青山法義さんと映画「トランスフォーマー」鑑賞、が気持はもう次の映画へGO!

大倭安宿苑では

(菅原園)
8月30日 納涼祭。冷やし素麺やフルーツポンチで涼を味わいました。

(須加宮寮)
8月25日 「弥栄おどり」に住苑者25名が参加、他施設や近隣の方々と触れ合いました。

(長曾根寮)
8月28・29日 奈良県高齢者美術展の見学。6名の方が書道を出展、上田幹蔵(森彦)さんが最高齢者賞を受けました。

8月28日 (デイサービス) 屋台や踊りで夏祭り。

秋桜を騒がせ通るお嫁入り 森彦
(八重垣園)
8月27日 今年も鈴虫を頂きました。

9月3日 園単独防災訓練。
俳句投稿箱より 「弥栄を願って踊る夜は更けぬ」「雑草を先き取り払い墓洗ふ」

ATMIC

* 月次祭(大倭神宮)
10月6日(土) 午後2時より大倭神宮にて。

* 大倭会主催第四六六回祝会
10月14日(日) 午後2時より大倭大本宮拝殿にて。(11月の祝会は文化講演会となります)

* 月次祭(大倭神宮)
10月15日(月) 午後2時より大倭神宮にて。

* 月次祭(大倭大本宮)
10月23日(火) 午後2時より大倭大本宮拝殿にて。

第296回 大倭会文化行事 秋の一泊旅行のご案内 — 阿波への道を訪ねる —

皆さん、お誘い合わせてご参加下さい。

日次：平成19年
10月28日(日) ~ 29日(月)

行き先：淡路島・徳島方面
(震災記念公園・伊弉諾神宮・藍染め工房など)

お泊り：淡路島海上ホテル
兵庫県南あわじ市南淡町福良甲21-1
電話 0799-52-1175

定員：50名程度

費用：28,000円

申込み：10月10日までに代金を添えて世話人へ

●世話人 湯浅芳郎●

電話 0742-48-3389・携帯 090-6987-5847

第19回 大倭会文化講演会

日時：平成19年11月11日(日)

午後2時より

場所：大倭紫陽花邑 拝殿

講師：菊地洋一さん

<タイトル>

「ひとつならぬ生命(いのち) — 原子力発電を考える」

<講師プロフィール>

1941年、岩手県釜石市生れ。32歳まで建築コンサルタント、米国GE社の技術者として東海、福島原発建設に従事。1980年以降約6年間、中近東で現地法人の責任者として石油関連施設等の設計・建設。帰国3年後に退職。50ccバイクで全国を回る。草花や昆虫の姿に命の尊さを感じる。ここ10年程は鹿児島大学で地球環境エネルギー論を担当、脱原発社会を目指す。

田んぼ通信

記録的な夏の暑さにもめげず稲はととも元気です。収穫の秋、どうぞ皆さま喜んでご参加下さい。

稲刈りと掉掛け

10月7日(日)
午前9:30~

*服装

長袖・長ズボン・長靴。帽子とタオルは各自用意下さい。

軍手と鎌は用意してあります。

*昼食・飲み物
ご用意します。(持込み歓迎)

連絡先 TEL 0742-41-4615
(玄徳院)